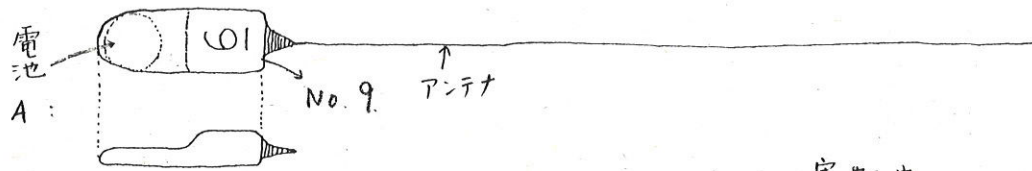


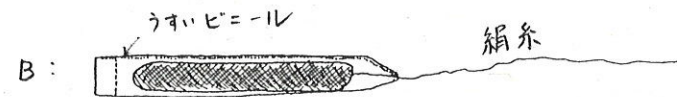
すっかんぽ

1992年3月号

サンショウウオをめぐる人々



実物大



上のA、Bは、何に使うものでしょう。Aは電池で作動するが、けして泳ぎ回るようなことはない。Bのビニール袋の中には、細い絹糸が約30m分を巻かれている。

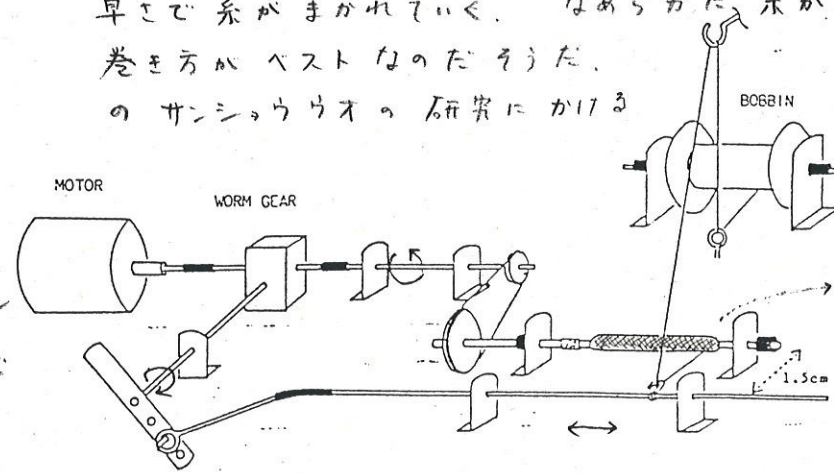
実は、A、B両方とも同じ目的に使われる

Aの方は、小型の電波発信装置で、テレメーターといい、重さは約1.5g、電池は約2週間ほどもちいられている。これを、カエルの背中にゴムバンドあるいは接着剤でとりつけ、発する電波で位置を確認するのだ。この装置は、金沢大学理学部の生態学研究室の戸田光彦さんが見せてくれたものだが、彼はモリアオガエルの生態を研究している。去年このテレメーターを使ったらしい。このテレメーターはNo.9だが番号ごとに同波数が与えられていて、個体の識別が可能である。ただこの装置、手作りのので、バカ高く1個1万円もする。これを10個使ったとすると

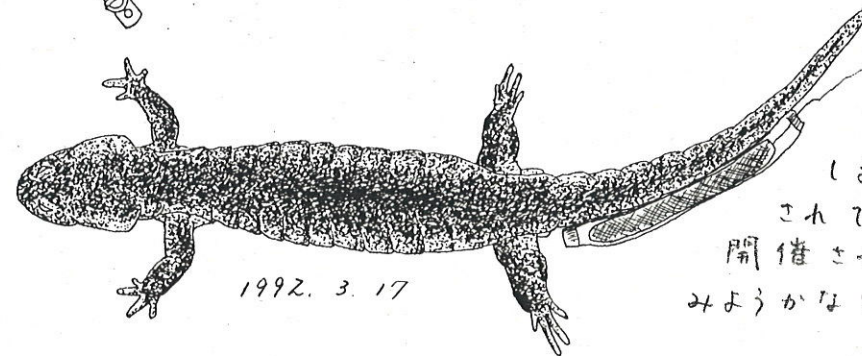
10万円になるが、成功率、回収率ともに50%程度で、「高くつくわりに、成果があまり上がらない」と話されていた。

この装置は、もともとある研究者が、半分趣味でつくっていたが、注文が多く、今ではそれが本業になっているらしい。なお、このテレメーターは、旧タイプで、現在は、0.7gまで小型化に成功しているようだ。新型のテレメーターをサンショウウオにつけて行動を追跡してみたらどうかと、戸田さんはアドバイスしてくれた。

一方Bは、同じ研究室の高橋久さんが自作したものだ。彼は新潟大理学部大学院まで金沢までサンショウウオの研究を続けている。出身が栃木市で、弟が数年前佐高を卒業したというので、妙な親近感がわいてきた。このBは糸巻き法といって、麻酔したサンショウウオの体に直接ぬいつけ糸の端をどこかに固定しておく。サンショウウオが移動するにつれて糸がくりだされ、歩いた跡をたどることができる。この方法の利点は、安上がりなことと、移動の状態を点でなく線でたどれるところにある。高橋さんは、この糸巻きを作るために、下の図のような装置を開発してしました。スイッチを入れると、ものすごい早さで糸がまかれていく。なめらかに糸が巻けるためには、このような巻き方がベストなのだそうだ。のサンショウウオの研究にかける情熱を感じた。



ところで、今日本には、ハ虫両生類学会が存在し、サンショウウオの研究者は、全国に何十人も



いるらしい。年一度の学会に出席しただけで、みんな友達になってしまうと、高橋さんは話されていた。今年、京大で開催されるらしいので、行ってみようかなと思つた。